

日本体育学会
体育哲学専門領域
会報
Vol.20(4), February, 2017

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 運営委員会より
- ♪ 第3回定例研究会のお知らせ
- ♪ 定例研究会発表者の募集
- ♪ 前号訂正について
- ♪ 次号予告

巻頭言

三人の先生

関根正美（日本体育大学）

昨年8月に大学院の恩師である片岡暁夫先生からはがきをいただき、慌てて電話をしました。その時の用件は、蔵書を整理しているので取りに来ないかとお誘いでした。昨年9月と11月に大学院生と先生のご自宅に伺い、かなりの量の蔵書をいただてきました。現在は私の研究室に保管してあります。ポール・ワイスの”Philosophy in Process”もあります。興味のある方は、ぜひ研究室に見に来てください。片岡先生といえば、私が院生だったころの筑波大学体育原理研究室報に、「晩秋から冬にかけての時間は、修士と博士の学位論文を読むことにほとんどが費やされる」旨のことを書かれていたのを思い出します。今、幸運にも自分が当時の先生と近い状況に身を置くことができ、多くの論文を読める境遇にあることの幸せを感じています。仕事が大変なことに変わりはありませんが、文句を言っはならないと思っています。片岡先生は変わらずお元気にされていますので、時々のご指導を仰ぎたいと思っています。

学部でお世話になった早稲田大学の佐藤真理人先生が今年の3月で退職されます。私が大学に入学した1983年に、専任講師で早稲田に戻ってこられたと記憶しています。卒論はニーチェの遊戯論をベースにした「フェアプレイ論」という今思えば恐ろしいテーマで書いたのですが、研究指導の時間しきりに先生が「芸術哲学や宗教哲学はあるのに、なぜスポーツの哲学はないのでしょうかねえ」とおっしゃっていました。競技で強くなれずに毎日悩んでいた自分にとって、この言葉は強く響きました。大学院でスポーツ哲学を研究したいという気持ちは、佐藤先生の言葉から生まれたのだと思います。佐藤先生は「日本ヤスパース協会」という学会の運営に力を注いでこられました。私もひそかにヤスパースの勉強をしており（別に隠しているわけではありませんが）、先生が退職される最後のチャンスに研究発表を聴いていただきたいと思い、昨年12月の大会で発表しました。題名は、「ヤスパース実存概念における抑制と静謐—ヤスパースのスポーツ批判を通して」です。先生が喜んでくださった（ように見えた？）ので、やっと卒業を認めてもらえた感じがしました。

ハンス・レンク先生は去年の3月いっばいでカールスルーエ大学の授業・ゼミナールを完全に引退されたそうです。81歳まで大学で教えていたことになります。去年の秋に自転車の転倒で脚を骨折し、手術のあと今も自宅でリハビリを続けているとのこと。そのような状況でも、これから出版予定だという論文の著者校正原稿ファイルを昨年末に何編か送っていただきました。大学での仕事は引退しても、やはり「成し遂げる人」であり続けていま

す。昨年から機会を見つけて会いに行きたいと考えているのですが、残念ながら実現していません。今年はどこかのタイミングで訪ねる予定です。2018年夏、北京で開催される世界哲学会議でお会いできるといいのですが。

前職から現在の職場に移って4年が経とうとしています。しかし、3人の先生に顔向けできるような自分の仕事が未だにできていません。いつか先生方に恩返しをと思いながら、人並みに多忙な毎日の中で月日が過ぎていっています。

関根正美 (msekine@nittai.ac.jp)

体育哲学考

M-GTA と体育・スポーツ研究

千葉洋平（日本福祉大学）

ここ数年、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach: 以下、M-GTA）という質的研究方法に関心を持ち、その手法を学ぶ研究会（M-GTA研究会）にも参加しています。

この研究手法を十分に理解し、実践していけるようになることは、容易なことではなく、勉強する度に新しい発見がある毎日です。まだまだ勉強途中ではありますが、ここでは体育・スポーツ領域における M-GTA の可能性について、現在の私なりの解釈から述べさせていただきます。

M-GTA は、1960年代に看護・保健、ソーシャルワーク、教育といったヒューマンサービス多領域を中心に提案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を基盤として、それをより実践しやすいよう木下康仁先生によって改善されたものです。

M-GTA は、1)他者との相互作用性や2)プロセス性があり、3)ヒューマンサービス領域における支援のための理論生成を目指した研究に適しているとされています。したがって体育・スポーツは、M-GTA を研究手法として用いやすい研究領域であると考えられます。

例えば、体育の授業の中で、子どもたちはクラスメイトや教師あるいは道具等との相互作用を通じて変容していきます。その過程を明らかにし、そこから体育授業の支援のための理論生成を目指す研究は、M-GTA に適したものだと言えるでしょう。ちなみに扱う変容の内容は技術的なものでも、精神的なものでもどちらでも構いません。

また M-GTA では、分析焦点者といったものを設定し、そこから研究対象の現象プロセスを、明らかにすることを試みます。先の体育の授業であれば、その授業を行う教師は分析焦点者の代表的な候補となります。その場合、教師の立場から見える子どもの変容プロセスを検討していきます。

データの収集方法は主にインタビューです。研究者は自らの問題意識をもとに、分析焦点者に対しインタビューを行います。先の例で言えば、教師に対し、体育の授業を通じて起こった子どもの変容、変容が起こったきっかけとなる相互作用等について尋ねていきます。

インタビューを行う上で、その現象ならではの事柄を聞き出すことは重要なポイントの一つです。というのも、体育の授業における子どもの変容といっても、そこには種目や学年、性別、教師の経験等様々な要因によって内容や過程には違いがあるからです。集団種目と個人種目、あるいは同じ球技あってもネット型とゴール型では違いが存在するでしょう。同じ種目だとしても学年によっても異なるはずです。

M-GTA の最終的な目的は、扱う現象の構造とプロセスを全体的に表す概念図を示すことにあります。インタビューのデータ分析を通して、導かれた概念図からは、その現象を支援

するための理論が導かれます。体育の授業で生じる子どもの変容にはどのようなものがあり、それらがどういった相互作用を契機として始まっているのかがその図を通して理解できるようになります。そしてそのことから、どこにどのような支援をすることが、子どもの変容をより引き起こすことにつながるのかが明らかになるのです。

このように M-GTA は、限定された範囲内における理論の一般化が目的とされます。もし小学校3年生のサッカーの授業における子どもの変容プロセスを扱うのであれば、そこでの理論の一般化が目指されます。インタビューにおいて研究対象ならではの事柄を聞くのはそのためです。

その一方で、M-GTA は一般概念についても示唆を与えることが可能とされています。小学校3年生のサッカーの授業で、自由さが必要だと教師が述べた場合、その自由さとはどのようなもので、なぜそれがそこでの子どもの変容に意味を持つのが検討されていきます。そしてそれは、自由の概念についても貢献できる可能性が出てきます。私としては、ここに体育・スポーツ哲学における M-GTA の意味があるのではと考えています。

ここでは M-GTA について特に体育授業を例として考えてきましたが、もちろんそれ以外にも M-GTA を研究手法として用いることができます。皆様の問題意識から、M-GTA について考えて頂けるきっかけとなれば幸いです。

千葉洋平 (chiba@n-fukushi. ac. jp)

書籍紹介

高橋洋一 (2016) 『儲かる五輪：訪れる巨大ビジネスチャンス』(角川新書)

林 英彰 (京都教育大学)

本書は、表題にもある通り、五輪を巨大ビジネスチャンスととらえる立場からその効用を説く啓蒙的な一書である。著者の高橋洋一は、統計数理を得意とする経済学者であり、旧大蔵省・財務省勤務を経て、現在は大学教員を務める傍ら、政治・経済評論の世界でも活躍している。小泉純一郎政権の政策ブレーン、アベノミクスの理論的サポーターとして認知しておられる方も多いのではないかと思う。高橋は、財政政策について「上げ潮派」を自認しているが、本書の目次は、上げ潮派・高橋の面目躍如の感がある。

第一章 世界経済と TOKYO2020

第二章 商業主義時代の五輪

第三章 TOKYO2020 が儲かる理由

第四章 TOKYO2020 で儲かるビジネス

第五章 儲かる五輪が日本を変える

高橋は、1984年のロサンゼルス五輪について、「それまで抱いていたもやもやが晴れ、すっきりした大会だった」という。建て前としてのアマチュア精神を取り下げて商業主義で考えることは競技レベルをめぐるもやもやも、運営をめぐるもやもやも晴らしてくれたというわけである。高橋にとって“ビジネスライクな損得勘定”ができることがまず重要なのである。高橋は言う。

ビジネス以外のアプローチとなると、後はイデオロギーだ。オリンピックはかくあるべし、という思い込みしかない。ビジネスとして成立しないがやるべきだ、となったら税金を投入するしかない。いまでも国が各スポーツ団体に選手強化費を与えているが、その

金額が大きくなればなるほどそこに利権が生まれる。税金を集めて、分配するというシステムこそ利権の温床であって、ビジネスとして、商業主義に徹してファンにアピールし、お金を儲けるシステムのほうが健全だ。

このような商業主義の称揚に対しては違和感を持たれる方も多いのではないかと思う。しかし、五輪に代表されるメガスポーツイベントが、莫大な資金の動くプロジェクトとなってしまう以上、“商業主義に対する批判”もむろん重要ではあるが、“プロジェクトに対する商業主義による批判”が重要性を増しつつあるとも言えるのではないだろうか。

この意味で、新国立競技場建設に絡む混乱についての高橋の論述は興味深い。この問題に関しては、TOKYO2020 開催決定（2013年9月）のやや後から丸二年以上にわたり膨大な情報が流され続けたが、そもそもなぜ当初案が採択されたのか、その決定について誰がどのような責任を負っていたのかを掘り下げた報道はあまり見られなかった。詳細は本文に譲るが、デザインコンテストの条件提示や当初案（ザハ案）の採択時点においてコスト計算に関する当事者意識が決定的に欠落していたことが、具体的な固有名詞を伴って論証されている。

またあるイベントが“儲かる”かどうかを評価する際に、どのようなタイムスパンで見通すべきかについても興味深い論点が提示されている。高橋は、米国の経済学者 A. K. Rose & M. M. Spiegel の研究 (The Olympic Effect, 2009) を累次引用して、五輪開催に伴う自由貿易促進や規制緩和の長期的経済効果を指摘しているが、五輪自体が短期集中型のイベントであるだけに短期的な功罪にとらわれがちになるわれわれに対し、マクロな視野を持つことの意義に気づかせてくれる。

高橋はスポーツの専門家ではないので、企画・運営の実務の観点からすればやや粗い立論も見られるし、“儲かる”という主張の論拠となっている“規制緩和”に関する楽観的見通しについても私自身は直ちに首肯できるわけではない。

しかし、われわれの大多数とは研究的背景を全く異にする一しかも現政権の政策に影響を及ぼしうる立場にある一高橋のような論客の主張と理論構成を心得ておくことは、スポーツ思想研究を現実から遊離させないための素養として重要であるだろう。そして、“損得勘定”に徹して考えてみることは、スポーツをめぐる言説がはらんでいるイデオロギー的な歪みを顕在化させる契機にもなるはずである。

林 英彰 (hayasi@kyokyo-u. ac. jp)

私の研究

山口順子（早稲田大学非常勤講師，津田塾大学名誉教授）

「私の関心は「共学」(co-education) です！」 こういうと、普通は男女が共に学ぶことを思い浮かべるかもしれない。しかし、ここでいうのは、男女に通じる「心とからだの共学 (co-education of mind and body)」のこと、全体的な人間の育成のことである。

「全人」というキーワードに初めて出会ったのは1960年代中頃で、「教育原理」の教科書だったか、“whole-man”とあり「なるほど」そう表現するのだと、文字が立ち上がってきた感覚はいまも忘れられない。

私が長いあいだ勤めていた津田塾の建学の精神も、「全人教育 (オールラウンド・ウィメン)」で「リーダーシップを発揮して社会に新しい流れをつくり出す、バイタリティ溢れる女性をそだてる」こと、あるいは「女性の自立やリーダー育成」である。

そもそも私は、オールラウンド・ウィメンの目標のもとで、「(姿勢と)動きの教育 (movement education)」に携わったのが原点である。1970年代始めに、1940年頃に津田でリズム運動を

指導していた英国人教師の学校（ロンドンのメダウ・スクール）を訪問し、その後、北米の大学院でも学んだ。「動きの教育」は、人間の身体運動に内在している精神性を強調する立場である。たしかに伝統的な Physical Education でも、身体運動の発達が人間の「知・情・意」の形式に寄与する点を見逃していたわけではない。しかし伝統的なアプローチでは、「身体的なるもの (the physical) と、「精神的なるもの」(the mental)は、重なり合うことなく、あくまでも外在的関係にとどまっていると感じた。私はこの心身の並列的な把握が不満であった。なんとか「活動する身体こそが精神である」と言えないものかと、心身が相互浸透することばや教育形式を求めていた。身体感受性やムーブメント・アウェアネスを高め、身体化された認識の発達を可能にすること、それが学問的アイデンティティの構築にも繋がる、と考えていた。

近代西欧の「生の哲学」の潮流の中に、東洋的な思想を据えようと挑んだのは西田幾多郎だった。西田哲学の日本語は難しく当初はわからなかったが、初期の作品である「善の研究」が、活動する人間の意識研究でもあると理解した頃から分かりやすくなった（実を言うと英訳の方が平易）。そして西田哲学をも参照し、パフォーマンスする身体意識の流れの検討を試みた。具体例は、時代や社会をくぐることで文化的価値を持つ、世阿弥の「演技論」から4つの身体意識の階層性（表層の明晰な自我意識から深層の無我意識まで）を抽出した。こうした研究は、その後に出会ったソシュールの理論や丸山圭三郎による「言葉と無意識」の世界にも繋がった。嬉しかったのは、身体運動という文化現象を「非日常の出来事」として捉えるだけでなく、日常とパフォーマンスの世界を分断せずに、連続軸上に一帯的に把握する道が拓かれたこと。結果、身体活動という文化現象の説明には、東洋と西洋の両方の身体観が不可欠であることを示唆できたことだ。そして個（経験）とその集合的社会（文化）をくぐらせて普遍化（一般理論化）を進める道筋に、欧米の研究者の仕事が繋がっていくようになった。

森有正のいう、自分の経験という独創的なものをあらわすには、非独創的な、社会的、客体的なことばを使わなければならないが、共通なことばによって個人の経験が普遍的なものに広がっていくのだと気付かされたのである。

1991年の大学設置基準の大綱化により、津田塾の必修授業はわずかだが減少した。しかし、さらなる充実を目指して4単位必修（動きの教育：1年次必修、健康教育：2年次必修、余暇教育：2年次必修は、世界のダンス、スポーツ、太極拳、コンディショニングなどを含む）に加えて、自由履修の2単位（野外教育、カウンセリング論、世界の身体文化論 etc.）を開設した。真面目に熱く取り組む学生たちにもずいぶん励まされた。

私個人は、身体運動の意味や価値の探究とともに、1990年代半ば頃から世界のパフォーマンス文化論の枠組みで「象徴形式としての身体運動」の文化研究を実施し、世界の民族スポーツ、北米ネイティブの身体技法の調査研究などにも携わるようになった。

付記：国際スポーツ哲学会より

現在、私は「国際スポーツ哲学会 (IAPS)」の理事（当番）で、“member at large”と“program committee”に関わっている。そこで最後に大学院生の研究発表には「旅費の補助」があることを述べておきたい。手続きは申請書類に指導教員の推薦サインを得て委員会宛にメールで送付する（応募用紙はホームページから）。補助金の原資は、IAPS 構成メンバーの年度会費にプラスされる「寄付」で賄われる。年によってバラツキはあるが、多額の寄付が集まることに、学会の確かな運営、次世代をしっかりと応援する IAPS 構成員の意気込みを感じる。発表の形式は、本研究会とほぼ同様。大会抄録はこれまでは上限が500語。簡単な査読があるので英語のチェックをしてもらうことが不可欠です。

山口順子 (juneyan@icloud.com)

運営委員会より

釜崎 太 (明治大学)

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします。現在、下記の URL にて HP を公開しております。これに関するご意見もお寄せ下さい。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

○専門領域メーリングリストへのご登録のお願い

新しいメーリングリスト「Freeml」(<http://www.freeml.com/>) の運用を開始しております。メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。グループへ参加するには、総務担当：高橋浩二 (takahashi@nagasaki-u.ac.jp) までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。

○体育・スポーツ科学情報コラムの発行について

日本体育学会企画による『体育・スポーツ科学情報コラム』が発行され、全ての専門領域から情報コラムが寄せられています。下記の URL にてコラムが公開されておりますのでご覧下さい。

<http://taiiku-gakkai.or.jp/column>

釜崎 太 (kamasaki@meiji.ac.jp)

第3回定例研究会のお知らせ

阿部 悟郎(東海大学)

平成 28 年度第 3 回定例研究会を 2017 年 3 月 11 日 (土) に下記の要領で開催いたします。なお、研究会終了後 18 時より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

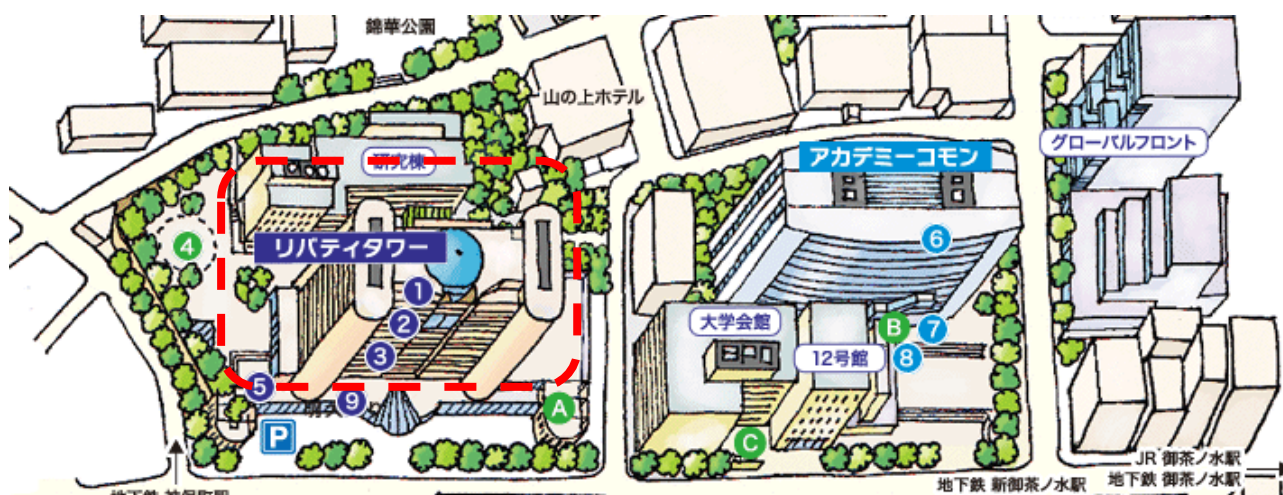
- ・日 時：2017 年 3 月 11 日 (土) 15:00~17:30
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リバティタワー・7 階 1075 教室
詳細は下記 URL をご参照下さい。

http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/6t5h7p000001h0z0-img/720_campus_suruga.gif

JR 中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分

東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分

都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



発表内容（予定）

【発表①】白川聡美（お茶の水女子大学大学院）震災被災地における芸術家派遣事業

が抱える課題と展望—ダンスアーティストの視点に着目して—

近年、ダンスアーティストが学校や施設に赴いてワークショップ等の芸術活動を行う、いわゆるアウトリーチが行われるようになってきている。本研究ではアウトリーチが持つ社会包摂機能という概念に着目しながら、文化庁による震災被災地でのアウトリーチの成果や課題を、ダンスアーティストの視点から捉える。またそれによって、被災地でダンスの力がどう活かされてきたかを明らかにすると共に、よりダンスが被災地支援に活かされるには何が為されると良いかの考察を行う。

【発表②】安藤健太（日本体育大学大学院博士前期課程）ピエール・ド・クーベルタ

ンの教育論—ハーバート・スペンサーの教育論と比較して—

ピエール・ド・クーベルタンは、近代オリンピックの復興者だけではなく、教育学者としても知られている。彼の教育学的思想に最も影響を与えたとされているのは、トーマス・アーノルドである。本研究は、別視点で考察を試みる。なぜならば、イギリスの教育学者ハーバート・スペンサーの『教育論』と題目（知育論・徳育論・体育論）に共通点が見られ、両者の関連性が示唆されたからである。本研究の目的は、両者の教育論を比較し、知育論・徳育論・体育論の三点に渡ってどのような関連性があるかを明らかにすることである。

【発表③】佐藤 洋（日本体育大学大学院）有徳な状態からみる競技者論：アリスト

テレスの実践学を導き手として

本発表は博士学位論文として提出したものに基づく。本研究の目的は、競技者の「善さ」を明らかにすることである。先行研究ではひとつに競技者と卓越性（excellence）が関連づけられる。例えば競技者の卓越性とは得点や時間によって数値化可能な強さと謂われる。だが競技者にかかる「善さ」の観点はこれだけでない。競技者の人間的な「善さ」は、徳（virtue）と関連する。徳の研究史を紐解けば、アリストテレスのアレテー論が導かれる。そこで本研究ではいくつか意味内容のある「善さ」を「有徳な状態」と捉える。そして競技者の「有徳な状態」は、「アレテー（徳）」論に基づいて明らかにされる。

阿部 悟郎 (gr-abe@tsc.u-tokai.ac.jp)

定例研究会発表者の募集

平成 29 年度第 1 回定例研究会については、日程を 5 月中下旬から 6 月上旬、会場を東京
界限で模索・検討中です。つきましては、平成 29 年度第 1 回定例研究会の発表者を募集いた
します。発表を希望される会員の方は、現定例研究会担当（阿部悟郎：gr-abe@tsc.u-
tokai.ac.jp）と現事務局（釜崎太：kamasaki@meiji.ac.jp）にその旨、ご連絡願います。

なお、定例研究会の発表申込は、常時、承りますので、ご希望の際には運営委員会定例研
究会担当・事務局へご連絡願います。よろしくお願い申し上げます。

前号訂正について

釜崎会員より、『会報』20(3)の定例研究会「発表内容（予定）」の「【発表④】釜崎太(明治
大学) ビジネス時代のスポーツ哲学—消費社会のなかのスポーツと公共性—」について、下記
の訂正依頼がありました。

「市場拡大」⇒「観客動員数の増加」

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は
河野清司（konok@sgk.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第 20 巻第 4 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
舛本 直文（会長）
編集者 杉山 英人（広報委員長）
発行日 平成 29 年 2 月 10 日
連絡先 〒263-8522 千葉県稲毛区弥生町 1-33
千葉大学教育学部 043-290-2616（直通）
アドレス：hidetohsk@faculty.chiba-u.jp

【編集後記】

「体育とはどのような教育領域か」という素朴な問いに對
して、原理論的考察を深めていくことが本研究領域の大き
な責務といえます。そのための課題設定や方法論は各人各
様となりますが、本研究領域の発展のためには、その成果が
制度保障のための正当化や個別テーマ内での完結ではな
く、この問いに収斂していくことが求められます。そしてそ
の過程で、体育を方法論として（「方法としての体育」）、即
ち、体育を基点に現代社会への問いを深め、その特質を浮き
彫りにしていくことにより、本研究領域は自己完結するこ
となく開かれたものになっていきます。

2 年間『会報』を担当しました。この間、原稿依頼に快く
応じて頂いた方々に感謝致します。また、関連領域との積極
的交流という方針から、会員外の哲学・倫理学の研究者の
「巻頭言」や「書籍紹介」も掲載されました。今後も、活
性化のためにこのような交流がより積極的に進められること
が期待されます。（S）